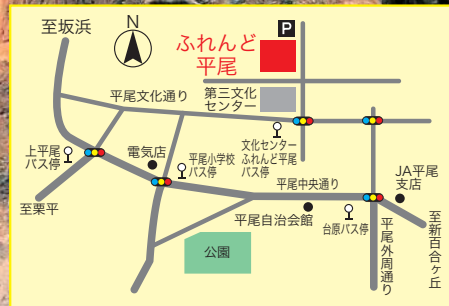


かわら や と かま あと 瓦谷戸窯跡と国分寺瓦

交通及び案内図（下部参照）

稲城市郷土資料室（ふれんど平尾2階）
京王相模原線「稲城駅」から新百合ヶ丘駅行きバス「台原」下車、
徒歩約10分
小田急線「新百合ヶ丘駅」から平尾団地行きバス「台原」下車、
徒歩約10分
※瓦谷戸窯跡の現地は、場所が急な崖地であるために、公開していません。



江戸時代から知られていた瓦谷戸窯跡

稲城市は、多摩丘陵のほぼ中央部多摩川の右岸の場所に位置しています。市域の2/3を占める多摩丘陵の地域は、緩やかな丘陵部が連なり、万葉の歌人たちによって「多摩の横山」と詠まれました。

稲城市の大丸地区には、都指定旧跡の「瓦谷戸窯跡」があります。この遺跡は「瓦谷戸」と呼ばれる谷戸にあり、昔から古代の瓦が発見されることで知られていました。江戸時代の地誌『武蔵名勝図会』に「瓦ヶ谷戸」の名が登場し、往古（大昔）に瓦を焼いた所であることが記されており、すでに江戸時代から瓦谷戸の名前は知られていました。

瓦谷戸窯跡の発掘調査

瓦谷戸窯跡の発掘調査は、昭和31年と平成10年に行われました。これらの調査で奈良時代の瓦を焼いた窯跡が4基と灰原（窯にたまった灰をかき出した場所）が発見されました。

窯跡は、地下式の有階有段の窖窯（斜面に沿ってトンネル状につくられた窯）で、稲城砂層をくりぬいて造られていました。このうち平成10年に調査されたB号窯は、全長約6.5mの大きさで、焚口から煙道までの構造がほぼ完全な形で残っていました。焼成室（瓦を並べて焼く場所）には7つの段が築かれていて、未焼成の瓦が当時のままの状態で見つけていました。そのほかに大量の瓦や埴（建物の床に敷くレンガ状の焼き物）が出土しました。

発見された出土遺物は、武蔵国分寺の創建期のもので、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、熨斗瓦、方形埴、長方形埴、仏具的須恵器など様々です。



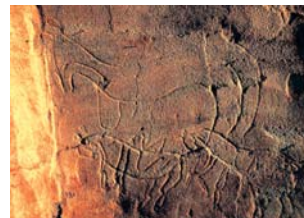
出土した瓦と埴

馬の線刻画と解文埴

発見された遺構や遺物のなかで、特に重要なものは、馬の線刻画と解文埴です。馬の線刻画はB

号窯の燃焼室右側壁から発見され、約1×0.6mの範囲に、棒状なもので3頭の馬が描かれていました。下部に描かれた2頭の馬は、鞍・ひずめ・たてがみなどが勢いのある線で描かれていました。このような馬の線刻画は、カマドの祭祀に関係するものと考えられていますが、国分寺瓦の生産に際して、火の神様に瓦生産の無事を祈ったのでしょうか。また、瓦窯内部から馬の線刻画が発見されるのは、全国的に見ても珍しいことです。

方形埴の表面に書かれた解文も重要な資料です。書かれた文字は「武蔵国荏原郡蒲田郷長謹解申」の13字で、武蔵国の荏原郡蒲田郷（今の大田区周辺）の郷長が上の役所にあてた上申文であることが判りました。各郡の郷長が、瓦や埴の生産に深く関わっていたことが判明し、国分寺の造営・造瓦の協力体制、生産状況の実態を解明するのに欠かせない資料といえます。



馬の線刻画

出土瓦は郷土資料室で

瓦谷戸窯跡（都指定旧跡）には、発掘調査により発見された瓦窯跡が、現地保存されていますが、現地在が川崎街道沿いの急峻な崖地であるために、現地での公開は行っていません。しかし、出土した瓦や埴などの遺物（都指定有形文化財）と窯跡の模型、馬の線刻画の造形保存資料などは、稲城市郷土資料室で展示・公開しています。

稲城市郷土資料室の公開情報

場所 稲城市平尾1丁目9番地1
（複合施設ふれんど平尾2階）

開館日 火曜日～日曜日 午後1時～4時

休館日 毎週月曜日 年末年始

※東京文化財ウィーク2008でも公開します。

問い合わせ先

稲城市教育委員会教育部生涯学習課文化財担当
電話 042-378-2111 FAX 042-379-3600
稲城市ホームページ <http://www.city.inagi.tokyo.jp/>